



リニューアル号 木曽川文庫

Vol.47
2003 SUMMER

KISSO

KISSOは木曽川文庫の治水情報誌。

1991年の創刊以来、木曽三川流域の治水史を中心に、地域情報をお届けしてきました。

さらに愛される情報誌をめざして、リニューアル。

12ページから16ページに増やして内容を深めるとともに、

写真、地形図などを多用し、

ビジュアル的にも親しみやすい誌面づくりを心がけました。

今後とも、ご批判ご意見をどしどしお寄せください。

リニューアル号では、海津町を特集。

歴史ドキュメントでは、赤坂宿を中心に紹介します。

海津郡海津町

ふるさとの街・探訪記

水と緑が美しい水郷地帯、
海津町

エリア・リポート

御手伝普請の推移と明和治水

気ままにJOURNEY

自然と人が出会う場所

歴史ドキュメント

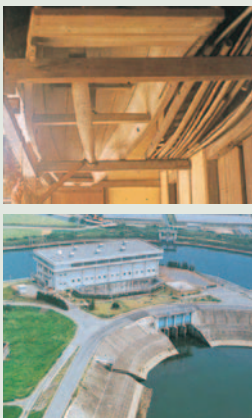
美濃赤坂宿と杭瀬川舟運

TALK&TALK

東西勢力対峙の赤坂・杭瀬川

民話の小箱

鎮守さまの竹やぶと清水



国土交通省中部地方整備局
木曽川下流河川事務所

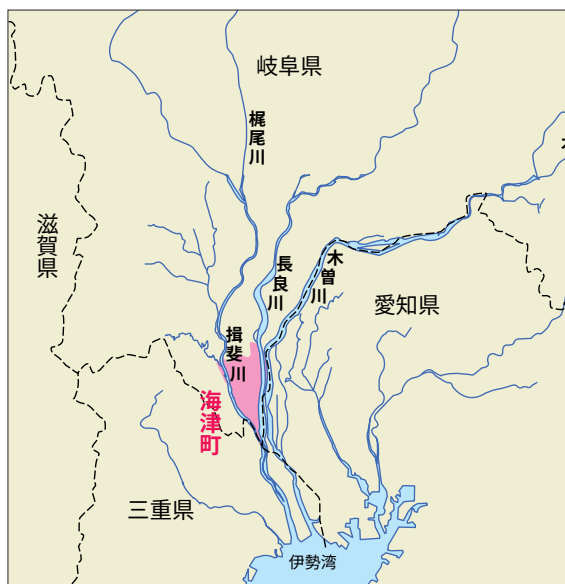
ふるさと探訪記

海津町

水と緑が美しい水郷地帯 海津町

本曾・長良・揖斐の三大川に囲まれた海津町は、典型的な輪中地帯です。三川が押し流す堆積土砂は肥沃な耕地を生み出す一方、連年のように水害や悪水被害を発生。その歴史はまさに水との闘いでした。近代に入り、土地改良事業や排水機場が設置され、緑豊かな農業地帯に成長を遂げました。

ふるさとの街・探訪記



海津町のあらまし

海津町は揖斐・長良・本曾の三川が集まる低平地です。岐阜県の最南端にあたり、大樽川・長良川・揖斐川に囲まれた地域が高須輪中です。西濃地方では大垣輪中と並ぶ大きな輪中で、海津町の面積が七割を占めています。

町内における海拔ゼロm以上の地域は全体の五分の一に過ぎず、最も低い地域は海拔マイナス〇・七mです。南部に下るにつれ土地は低くなり、古来より海津

町の歴史は洪水との闘いでした。

築堤の歩み

太古の時代、海津町周辺は伊勢湾でした。長年に渡って本曾三川が運んだ土砂が州を形成、微高地に人々が住みつくようになりました。

昭和三五年（一九六〇）には、海津町平原で平安初期の住居跡二・三ヶ所が発見されました。住居跡からは鎌倉初期の陶片も発掘されており、高須輪中の北部では平安初期から鎌倉初期まで集落が形成されていたと推定されます。

「高須旧記」によれば、秋江という集落では堤防を築き新田を形成、民家九軒が農業を始めたと記しています。秋江は鎌倉期を通じて近衛家領として開発が進められ、また、平治の乱に敗れた源義朝が揖斐川を下り知多半島の野間に逃れましたが、その折海津町の沼新田に立ち寄ったという言い伝えもあります。

このことから農業集落の形成が徐々に進められ、洪水防衛の方法も、自然堤防

を利用した部分堤や上流からの水を防ぐ尻無堤、伊勢湾からの海水の浸入を防ぐ潮除堤というように、発展していったことがうかがわれます。

後醍醐天皇の元応元年（一三一九）、伊勢湾からの海水の浸入を防ぐため、潮除堤防が築かれ輪中が形成されたと「百輪中旧記」にみえます。しかしこれは、輪中堤のような治水能力の高いものではなく、輪中の成立は近世以降という説が主流であることからみても、この時代、尻無堤や潮除堤をめぐらせた輪中の前身が形成されていたと推定されま

す。現在、高須・西小島・東小島の南境に潮除堤の旧形が残されています。

天正一四年、本曾川の流路が現在のように変動すると、新本曾川が濃飛両国の国境となり、海津町の一部は美濃国に編入されました。旧本曾川筋は現在、海津町の中央を南流する大江川といわれています。

高須輪中の成立と新田開発

高須輪中は南西部に本阿弥輪中、南



端部に金廻輪中を含んだ複合巨輪中です。複合巨輪中の中で一番最初に開発されたのが金廻輪中で、天正一四年、続いて福江輪中が慶長二年（一五九七）、松山中島輪中が正保三年（一六四〇）に成立し、現高須輪中の北東部の開発が完了しました。高須輪中の中央から南西部の開発は、慶安二年（一六四九）に本阿弥輪中、承応元年（一六五二）それより南の帆引新田、明暦三年（一六五七）七右衛門新田、享保一七年（一七三二）万寿新田が成立し、こうして隣接する小輪中を堤防で囲い込むことになり、現在の高須輪中の原型が成立しました。

本阿弥輪中は町人請負による新田です。発起人は京都の富豪本阿弥家の佐野三郎左衛門紹益で、開発した本阿弥家にちなみ高須藩主が本阿弥新田と命名

ふるさとの街・探訪記



海津町空撮(木曾三川公園)

しました。

帆引新田は高須藩士の内田甚三郎が藩に金子を用立てた見返りに帆引島と呼ばれた地の開発を許可された場所。七右衛門新田は立田村の大井七右衛門らによる請負新田で、開発者の名前が地名となりました。

遅れて開発された万寿新田は、高須輪中の南西部で土地は低く、損斐川の古い入り江であった満中池の一带にあたります。ここは高須輪中の悪水が集まると

ころ、満中池の横手堤に多くの坎があり、また、ところが損斐川河口からの逆流や上流筋からの土砂流入で池床が高く、なり、坎から池へ排水することが難しくなりました。そのため笠松郡代辻甚太郎は満中池の新田開発と排水路の延長を計画しました。工事には十年の歳月を費し、完成により高須輪中のほとんどの悪水は万寿新田先で損斐川に排水されることになりました。

しかし、連年のように押し寄せる洪水や大地震による地盤沈下、排水不良のため、開発から百年後の本阿弥新田は年貢米が年二、三石という窮乏でした。

治水と排水工事

輪中地帯は、河川からの流出土砂が肥沃な耕地を形成する半面、水害常襲地帯でした。特に、尾張藩の御開堤が完成し、上流の大垣藩の治水事業も進むと、その危険は深刻化しました。

延享三年（一七四六）、高須輪中四〇ヶ村は幕府に対し三川分流工事実施を願い出、翌年奥州二本松藩に御手伝普請が命ぜられ、以降分流策等多くの努力が払われました。中でも宝暦三年（一七五三）、薩摩藩の御手伝普請は近世史上最大規模の治水工事でした。

この三川の治水事業と並行するように実施されたのが排水事業です。

慶安元年から明暦三年（一六四八～五七）にかけて高須輪中南西部の低地は急速に開発され、それに伴って、大江通り・中江通り・新江通りの排水路は整備されました。

江とはもと堀・溝のことであって



薩摩藩御手伝普請目録見絵図

堀田と堀田の間の田舟の通路を指していますが、大江川のように大きいものを江と呼んでいました。

各水田から排出された悪水は大江通り・中江通り・新江通りへ坎の扉を通して集められ、やがて損斐川落口に坎をつくって合流します。しかし、勾配が小さく、海潮にさえ影響を受ける排水は水の滞留が多く、洪水に際してはなかなかひかず、村々を苦しめていました。まして木曾川・損斐川が土砂を堆積し、下流が川筋を開墾して川幅が小さくなると、湛水被害はますます深刻化しました。

こうした内水被害を解決するために

農民は度々悪水路の整備を願い出ています。延享・明和の普請では、長さ一七六間の新江を開削し、また江桁の築堤をお願い出て許可されています。その後、天明・寛政の普請、文化・文政・天保の不振においても坎や水

門、悪水路の整備を実施しています。

堀田と河川交通

明治時代に入り、海津町域に該当する村々は明治四年笠松県・名古屋県に、明治十一年には岐阜県に所属後、昭和三年、現在の海津町が誕生しました。江戸後期から明治にかけて、この地で造成されたのが堀田です。

堀田は輪中低湿地帯における耕地の生産性を高める耕作形態です。具体的には湿地の土を掘りあげ積み重ねて耕地とし、掘った部分は地下水位が高いため短冊状の池沼ができます。これが「掘潰れ」で大江通りなどの悪水路と直結した水路でした。

輪中地帯にとつて河川や江は人々にとつて大切な足。明治二〇年（一八八七）に着工された木曾三川下流改修（通称明治改修）や土地改良事



堀上田と掘潰れ



ふるさとの街・探訪記

業によって、江や河川は改修され、河川交通のあり方は変化していますが、それでも昭和の時代までは暮らしを支える動脈でした。

高須輪中を囲む東の長良川、西の揖斐川は、上流の各川湊と桑名・名古屋・四日市・常滑方面を結ぶ重要な河川航路でした。秋江村・日原村・森下村など、渡船のあるところには土場・船付場があり、長良川と木曾川を連絡するため、明治三十五年（一九〇二）船頭平に閘門が作られており、長良川上流の川湊と木曾川の川湊を往来していました。

また、明治四〇年頃まで西小島渡船より大垣の船町まで夜船が通っていました。この舟は大垣行きの客を乗せ、水門川の水門をくぐり大垣の船町へ行くのですが、水門が夜開かれ夜通しかかって朝、船町に着くので夜船といわれていました。料金は一人一〇銭。水門川の水深が浅いときは舟を引いて上りますが、このときは一人二銭を出しました。

海津町の大半が掘潰れの水路が縦横に通じていたため、堀田へ行くときには田舟が利用されました。水路を家の前で引き、門先に舟をつなぎましたが、家の前までの水路が困難なところは、共同の舟付場をもっていました。早朝



田舟農業

の舟付場は大賑わいで、農具や家族、弁当・牛が積み込まれて、仕事に出かけました。女・子供でも上手に舟を漕ぐことができたようです。

洪水用としての上げ舟はごく一部の金持ちが所有しており、納屋の梁の上などに乗せ、非常の場合に備えました。

排水機場と土地改良事業

近世を通じて行われた排水事業も根本的な解決にはいたらず、悪水の排出は深刻な課題でした。大雨などで

揖斐川の水位が高くなると水門は幾日も開かず、悪水は田畑に冠水、この被害を少なくしようとして設置されたのが排水機場です。



中江旧排水機場

明治三六年七月、万寿新田地先に高須輪中で初めて動力揚水機を備えた中江排水機場が建設されました。翌八月には福江排水機場が、明治三八年には帆引新田排水機場が、翌年には石亀・札野の二排水機場が設置され、必要に応じて悪水を排水できるようになりました。

これらの排水機場は以後改良に改良を重ねられましたが明治時代における蒸気機関の機械設備は極めて初歩的なもので故障も多い上、

耐用年数も短かったため、その維持管理に多額の経費をついやしたようです。

排水機場の設置により内水対策は向上しましたが、昭和三六年の豪雨では海津町内の八割が約一m湛水するという被害に。そのため昭和四三年より本格的な調査を開始。昭和三六年の実績降雨でも田畑の冠水を三〇cm程度とするには排水能力が毎秒七五tが必要であるということになり、それまでは各地区毎に小規模な排水をしていたものを、大江川・中江川等の流域内の河川を整備して高須輪中排水機場を設置することとし、昭和五四年（一九七九）に完成しました。

排水機場設置の一方、昭和二八年から始まった揖斐川浚渫工事の残土を利用し、翌年油島地先から堀潰れの埋め立てが着工されました。続いて帆引新田地区、平原地区の埋め立てが行われ、併せて埋め立て跡地の区画事業が進められました。

そして昭和四六年の外浜地区での埋め立て及び区画整理で、高須輪中の土地改良もおおよそ完成しました。この土地改良事業により堀田や堀潰れを行く田

耐

舟など輪中地帯の典型的な風景も姿を消しました。

ゼロmに息吹くふれあいのまち

相次ぐ治水事業や土地改良事業により、海津町は豊かな農業地帯へと発達しました。名古屋・岐阜市・大垣市・桑名市等、三〇km以内という恵まれた立地条件を生かし、都市近代農業が成長。米作中心から園芸作物・野菜の栽培が普及し、経営の多角化による近代的農業が推進されています。

現在情報インフラの整備を進めており、平成一四年度は公共施設を光ファイバーで結ぶ地域イントラネットを整備し、各施設から行政情報の提供及び学校間においてはテレビ会議（授業等）ができるようになりました。引続き平成一五年にはブロードバンド時代に対応した新世代地域ケーブルテレビの整備を完了し、家庭にいながら日本或いは世界の情報がインターネットで得られることになりました。

また、「ゼロmに息吹くふれあいのまち」を目標に、自然と調和のとれた心温まる町づくりを目指して、様々なプロジェクトを実施しています。

参考文献

- 『海津町史』 通史編上下巻、民俗編昭和四七年 海津町
- 『日本歴史地名大系』 二二巻 岐阜県の地名 平成元年 平凡社
- 『伸びゆく輪中』 平成四年 海津町
- 『角川地名大辞典24岐阜県』 角川書店

御手伝普請の推移と明和治水

本曾三川の治水は、美濃、尾張、伊勢の三国に与つて生命線を握るものでした。江戸時代には大規模な御手伝普請が一回実施されています。中でも明和五年の治水事業では、油島の締切が完成といえ、幕末に至るまで幾度も改築・修築が行われています。

江戸時代の治水制度

本曾三川の治水は古くは「防河役」という制度があり、洪水で堤防などが決

壊すると、各関係の村々・荘園から役夫をだして堤防を修築していました。徳川幕府の時代になると工事費の負担の仕方によって、公儀普請・御手伝普請・国役普請・自普請の4種の制度が設けられました。

公儀普請とは幕府の費用で全ての工事をまかなうものです。

御手伝普請は公儀が普請を行った折、命令を受けた大名が御手伝をしたもので、美濃国では延享四年（一七七四）、陸奥国二本松藩をはじめとして、文久元年（一八六一）まで一六回行われました。

国役普請は公儀が工事費の一部を負担し、残

りの大部分を国役の百姓人足が担当しました。

自普請は百姓普請の他、大名自普請があります。これを手限普請ともいい、美濃国では国役人足を免除されていた尾張藩・大垣藩・加納藩・高須藩・岩城平藩をはじめ、高木三・三輪岡田家・清水の岡田分家が自力で行う普請のことです。

御手伝普請の推移

御手伝普請を指名された大名は原則として経費の負担でした。普請の企画・立案から人足による実施まで一貫して幕府が行い、これに指定大名が助力をしました。幕府は役人を普請御用掛として現地の指揮にあたらせ、美濃在任の笠松郡代・水行奉行高木三家に協力させて、村方請負または町人請負として人足を動員しました。いくつかの分担地域に分けて工事は進められましたが、笠松陣屋の堤方役は熟練した手腕で現地を支配しました。御手伝大名の家臣らも分担地域に配属されて、堤方役に協力しました。

工事に必要な原材料のうち材木については幕府が支給、石は無料でした。しかし、採掘や運送、工事にかかる人足賃は必要で、こうした経費の大部分を御手

伝の大名が支払いました。

幕府では宝暦治水をはじめとした御手伝普請について、勘定奉行から老中筆頭へ町人請負ではなく村方請負にすれば窮迫した村方の財政援助になるばかりではなく、又夫々普請とすることを上申し、民生的立場を明らかにしています。また、各藩から御手伝の方の役人を多く出張させても、現地不案内ゆえ、現場を指揮するだけの人数にとどめ、無役の人数を派遣しない方がよいとしています。

薩摩藩の江戸家老も在国の家老宛に御手伝普請命令受領後、御手伝大名から役人を多く出す必要はないと述べています。

元来、御手伝普請は経費の手伝いを主眼としていました。しかし、薩摩藩は南海の雄藩という格式から約千人を送り込んでいます。

本曾三川の分流を初めて本格的に手掛けたのが宝暦治水でした。四〇万両の工費で下流域の延べ百十キロを整えましたが、藩の財政を窮迫させた責任で総奉行の平田朝負は自刃。五七名の割腹者と三二名の病死者を出す難事業となりました。

明和の御手伝普請は、明和三年と五

明和3年御手伝普請所絵図(山口県文書館蔵)

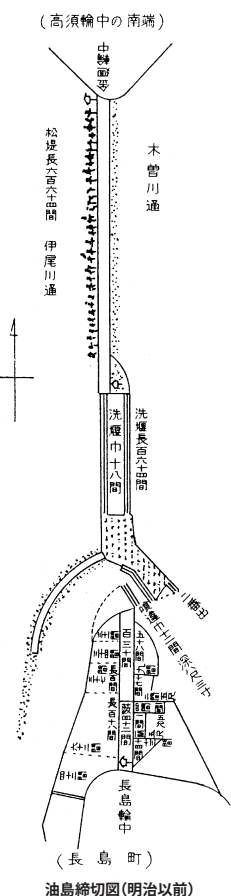


改革の成果を利用し財政のやり繰りができたこと、当初から難工事などを専門の土木工事に請け負わすことができたこと、犠牲者の存在がみられないことなどの原因が考えられます。

しかし、高須輪中五〇数ヶ所の普請場をはじめ大樽川洗堰の全面築造

五年の普請でさらに二五〇間堤防を築造しました。そしてその一部に二七六間の洗堰(木曾川三合目の洪水で溢流を設け、そのさきにさらに八五間を築造、油島新田側の全延長を九五五間とし、内六〇間を食違堰としました。また松ノ木村からは、寛延三年に二〇間、宝暦治水で二百間を築造、明和五年にはそれを二二六間に改造し、内六〇間を食違堰としました。

洗堰・食違堰の合計は二一八一間と



油島締切図(明治以前)

は、石亀村・本阿弥新田等で堤防決壊があり、多くの村々が収穫ゼロという被害を受けました。早速、国役普請で復旧工事が実施されましたが、それでは対応できず、翌年、長州藩・岩国藩・小浜藩の三藩に御手伝普請が命じられました。

工事関係村々は一四〇ヶ村、工事場は三百ヶ所を越え、その中には、高須輪中の万寿新田悪水吐玖樋(二基、大樽川の修築や、負担追加された牛牧間門築造のような、それぞれ数千両を要する工事)も入っていました。

工事は三月二八日に着工し六月八日に全工事が終了するというスピードで、長州藩の八百人をはじめ総勢千二百名の藩士が参加しました。長州藩が負担した工事費は二五万両、工事区域は宝暦治水エリアをはるかに越える全長二八〇kmに及んだといわれています。

このように大規模な工事でしたが宝暦治水ほど知られていないのは、御手伝普請の藩が、それぞれ多額の負担を、藩政

を受け持った岩国藩の経費は四万両に及び、藩財政は打撃を受けました。

明和三年の普請は犠牲者をださず終了しましたが、その直後の六月二日、木曾三川下流域では大洪水が発生しました。そのため、明和五年には御手伝普請を、阿波徳島藩・豊後岡藩・久留米藩・伊予大洲藩・筑後秋月藩に命じました。場所割は徳島藩に油島締切堤並びにその前後の丈夫附を担当させました。

油島の締切堤は寛延三年(一七五〇)の着工以来、宝暦治水を終、明和五年の治水事業によって締切が完成しました。

工事の経過は、寛延三年まで油島新田と対岸の松ノ木村まで川幅が千間以上あったものを、油島新田側から寛延三年に七〇間、宝暦治水で五五〇間、明和

なり、お互いの食違堰六〇間のうち五〇間については川幅を二二間あけて通船できるようにしました。油島締切堤の完成後もたびたび洪水によって破損され、御手伝普請、自普請などによって修築・改築されています。明和五年の普請で御手伝大名が拠出した経費は全部で一四万両でした。

明和の御手伝普請

明和治水については、岐阜女子大学地域文化研究所長の丸山幸太郎先生が木曾川上流河川事務所の依頼を受けて三年間にわたり地道に調査を続け、次のような実情が明らかになりました。

明和二年(一七六五)、木曾三川の中下流全域で水害が相次ぎ、高須輪中

参考文献

『木曾三川の治水歴史を訪ねて』

木曾川上流河川事務所

『海津町歴史民俗資料館 館報第三号』

平成一五年 丸山幸太郎調査文

『海津町史』通史編 上巻

昭和五八年 海津町

二〇〇五年FISA世界ボート選手権大会

日時二〇〇五年八月二八日(日)〜九月四日(日)
会場岐阜県海津町 長良川国際レガッタコース(国営木曽三川公園内)

主催 国際ボート連盟(FISA) 主管 社日本ボート協会 岐阜県

アジア初の開催

二〇〇二年八月一八日、スイスのルツェルンで開催されたFISA(国際ボート連盟)定例総会において、二〇〇五年FISA世界ボート選手権大会の会場



長良川国際レガッタコース

を岐阜県海津町の長良川国際レガッタコースにすることが正式に承認・決定されました。アジアでの開催は初めて、日本ボート界にとつての念願であり歴史的な瞬間となりました。

この大会の開催当事者は開催都市と定められていたが、県単位に拡大解釈することをFISAに確認した上で、開催当事者を(社)日本ボート協会と岐阜県の共同主管としました。

当初立候補が予定されていた国は、中国(上海、ブラジル(サンパウロ)も含まれていました。が最終的には、日本・ブルガリア・ポーランドの三ヶ国が立候補していました。

ボート競技の歩み

ボート競技は一八世紀初頭、英国テムズ河が発祥です。テムズ河辺に生きる漁師、渡し守、造船所などで構成される

漁商組合が一七一六年にシングルスカル(当時は公園ボートのようなもの)でロンドン橋〜チェルシー橋間四マイルで初めてレースを行ったという記録が残っています。

日本へは幕末時期に欧米の軍艦や商船でボートが持ち込まれ、文久元年(一八六二)、長崎で居留住民を中心に日本最初のレガッタが開催されました。

横浜においても居留英人を中心にボートが愛好され、明治元年(一八六八)に横浜ローイングクラブが設立されました。明治維新後、学生・実業団を中心に、ボート競技は全国各地へ広まりました。

オリンピックの正式種目として採用されたのは、一八九六年ギリシャ(アテネ)大会から。オリンピックの参加選手は、陸上・水泳に次ぎボート競技は三番目ですが、参加選手の大半が、ヨーロッパ・北米に偏っているため、かねてよりFISAはボートの世界的普及に力を注いできました。

世界ボート選手権は毎年一回開催されており、世界六五ヶ国、約千二百名の選手が出場し、シングルスカルなど計二四種目が行われます。

長良川国際レガッタコース

水と緑に囲まれた長良川国際レガッタコースは、環境に恵まれた日本最大級のコースです。

のコースです。また、全長二km、直線の二〇レーンが設定できるのは、世界でも稀少で、水流がほとんどないのが特長です。



FISA2002世界ボート選手権セビリア大会

FISAの関係者らは二〇〇二年四月一六日に来日し、大会会場となる海津町福江の長良川国際コースを視察しました。来日メンバーは、アト・スミス専務理事をはじめ、モントリオール五輪女子ダブルスカルの金メダリスト、スベトラ・オツェツバ施設委員長ら八人。二kmのコースを小型船で巡回し、審判艇や救助艇として使われるボイ・クラフトの実演も行われました。スミス専務理事は「美しい自然のコースに現地の完璧な協力態勢に感謝したい」と評価。オツェツバ施設委員長も「水面の条件が非常に良く、観客席のスペースも充分」と絶賛しました。

会場となる木曽三川公園は整備費として三四億六千九百万円が認められ、長良川サイバースセンターの二期工事や駐車場整備を進める予定です。

選手権の開催が二〇〇五年愛知万博の開催時期と重なるため、愛知万博への来場者を大会に呼び込みたいと考えています。

自然と人が出会う場所

きらめく光を受けてゆったりとカヌーを漕ぐ人々。夢中で河辺を走り回る子どもたち。穏やかな水郷地帯は、自然の宝庫。四季折々に水鳥たちが舞い降りてきて、優しい風を感じさせてくれる。美しい輪中も、その足取りは水との闘い。そんな足跡を追いかけて、海津を旅してみよう。

美しい自然の宝庫

東名阪自動車道の長島インターから北へ約一〇分。長良川大橋を渡ると、そこは海津町。木曾・長良川の大河は初夏の光を浴びてきらめき、河辺では水鳥たちが羽を休めています。約八〇種類の野鳥が生息するといわれる木曾三川は自然の宝庫です。水草が生い茂る水面下には魚類も豊富。太公望たちはのんびりと釣り糸を垂れ、野鳥愛好家たちはその美しい姿をフィルムに納めようと、シャッターチャンスをとらえています。

水と緑がまぶしい海津町は、美しい自然の肖像画。この穏やかな水郷地帯にも、牙を向き襲いかかる水との闘いがありました。そんな歴史や自然を訪ねて、海津町を散歩してみることになりました。

治水神社と治水観音堂

木曾三川に囲まれた海津町の形は逆三角形。その頂点、長良・揖斐川の二川が集まっているところに、治水神社はあ



治水神社

ります。ここは宝暦治水の責任者、薩摩藩家老、平田靱負を祭神とする神社です。

昭和二年の着工以来、実に一〇年の歳月をかけて完成



宝暦治水観音堂

しました。刀を持つ手を鍬に変え、骨身をけずって治水事業をやり遂げた義士たちの偉業は、広く共感を得たのでしょう。荘厳なたたずまいをみせる松造りの社には、感謝の念が宿っているようです。神社の北西側、朱色の隼人橋を渡ったところに、治水観音堂があります。御堂には治水観音大菩薩像と工事の犠牲となめた義士たちの位牌が祀られています。彼らの偉業を称え、毎年、春と秋、慰霊祭が盛大に行われます。これは海津町の人々が一体となって盛り上げるお祭りです。水郷太鼓や郷土芸能などが奉納されます。

油島千本松原と宝暦治水碑

長良川と揖斐川の間を走る背割堤、その堤を覆い尽くすように広がる千本松原は、薩摩義士たちが工事成直後に植えた日向松だといわれています。そ

の数が多いことから油島千本松原の名が生まれました。1km以上続く松原の南端には、工事を記念して建立された宝暦治水碑があり、哀しい史実を物語っているようです。

この一帯は国の史跡に指定されています。

水屋と助命壇

治水神社をしばらく北へ向かうと、どつしりとした石垣を組んだ建物が見えてきました。これが水屋です。頻発する水害

に悩まされ続けた輪中地帯の人々は、いざというときに生命や財産を守るため知恵を絞り、力を合わせてさまざまな手段を講じてきました。水屋もそのひとつ。母屋よりも一段と高い石垣の上に建てられた水屋は、洪水時の避難場所として生活物資が常備されていました。

水屋をもたない人々のための非難場所もありました。助命壇とい

う共同で作られた高台です。

その多くは村の共有物が多い中、私財を投じて築かれた助命壇もありま



本阿弥新田助命壇

した。海津町の重要民俗文化財に指定されている本阿弥新田助命壇です。ここは江戸時代、京都の豪商、佐野紹益が開発した新田ですが、この地域は洪水の常習地域で水害が絶えず、地主である佐野家が困窮する周辺住民のために、共同の

大江川



海・津・町・の・歳・時・記

◆第8回デレーケ記念木曾三川交流レガッタ◆

9月23日 木曾三川交流レガッタ実行委員会

明治時代の木曾三川改修事業に多大な功績を残したオランダ人技師ヨハネス・デレーケを称え、木曾三川の豊かな河川空間の活用と河川愛護を図る一環としてボート競技「地域交流レガッタ」を長良川において開催するもので、ボート競技を通じて地域の活性化とまちおこしを目指しています。競技種目は成年男子・女子ナックルフォア、壮年男子・女子ナックルフォア、熟年男子ナックルフォア、混合ナックルフォアです。参加費は1クルー7,000円。詳しくは下記までお問合わせください。



平田町教育委員会内「木曾三川交流レガッタ実行委員会」
TEL 0584-66-2792 FAX 0584-66-4648

海津町 EVENT INFORMATION

- チューリップ祭 木曾三川公園センター ……4月4日～16日
- 治水神社春季大祭 治水神社 ……4月25日
- 第8回木曾三川交流レガッタ ……6月22日
- わんぱくトライアスロン大会 長良川特設コース ……7月27日
- 第18回長良川国際トライアスロン大会 長良川特設コース ……8月3日
- 中日長良川カヌー・フェスティバル 長良川サービスセンター ……8月24日
- 治水夏祭り盆踊り大会 歴史民俗資料館駐車場 ……8月10日
- 上げ舟レース 長良川サービスセンター ……10月19日
- 第8回デレーケ記念木曾三川交流レガッタ
長良川国際レガッタコース ……9月23日
- 長良川ふれあいマラソン大会 長良川サービスセンター ……10月5日
- 治水神社秋季大祭 治水神社 ……10月25日



●交通のご案内●

◆名古屋方面からお車をご利用の方

名古屋西IC → 東名阪自動車道 (約15分) → 長島IC → 海津町 (約15分)

●お問い合わせ●

◆海津町役場◆ 岐阜県海津郡海津町高須515
TEL 0584-53-1111 (代) <http://www.town.kaizu.gifu.jp/>

海津町

安全を祈る常夜燈

「(太神宮永代)常夜燈」と書かれた燈明さんが、海津町平原・末広町・西小島・万寿に祀られています。これは舟の安全と水害から村を救うため、伊勢神宮の燈明としても建てられました。この常夜燈は、昔からの岐阜と津を結ぶ街道沿いにあります。水運と陸上交通の要所に設けられていたようです。

もともとこの地域は、輸送の道として川が利用されていたところ、航行の無事を祈り、舟付場の位置をはきりさせるため、今の灯台のように明かりがともされてきました。

オニバス群生地とパークセンター

農作業を終え我が家を目指す人々にとって、常夜燈の柔らかな明かりは「おかえりなさい」という挨拶だったのかもしれない。今では点灯されることもない常夜燈ですが、かつての暮らしをしのぶ貴重なモニュメントといえます。

輪中地帯の小河川や池や沼によく見られたのがオニバスです。和名のオニバスはハスに似てトゲがあることから。夏のわずかな期間に急速に成長し、種子の寿命が長いこと、生育の途中において葉の形が変わることなどが特徴です。全身トゲだらけで触れると痛く、また、大きい葉は堀や用水路を埋め尽くし、田舟を用いていた水



オニバス

田耕作にとっては害草でした。しかし、種子は食用となり、炒っておやつにしていました。

オニバスは、昭和初期まで珍しい植物ではありませんでした。しかし、近年の高須輪中土地改良によるほ場整備によって、池や堀が埋め立てられたことにより、絶滅が心配されています。

この貴重なオニバスが群生しているのは、国営木曾三川公園の「アクアワールド水郷パークセンター」。まずはオニバスを鑑賞したらパークセンターをそぞろ歩きしてみよう。ここは、日本で初めてNPOと手を携え、公園をより快適に、身近に利用できる施設として誕生したところ。カヌーの行き交う水路にオランダの跳ね橋がかかり、風車はゆたたりと風を受け回っています。オランダを思わせる風景は、明治時代、木曾三川の治水事業に貢献したヨハネス・デレーケにちなんでいるのでしょうか。エキゾチックな雰囲気を感じたり満喫することが

できる素敵なスペースです。

木曾三川公園のシンボル 展望タワー

海津町の旅の総仕上げは、なんといっても国営木曾三川公園のシンボル、展望タワーです。地上六五・三六〇度のパノラマ。濃尾平野の彼方には日本アルプスの白い連峰、南に転ずれば伊勢湾の雄大な光景。眼下に広がるとうとうたる木曾三川や水と緑の海津の田園。この素晴らしい眺望に教えられるのは、自然の大切さです。人と自然が共生する未来を創っていききたいものです。



展望タワー

特集 川と街道 第四編

美濃赤坂宿と 杭瀬川舟運



旧杭瀬川

北に金生山を背負い東に杭瀬川が流れる美濃赤坂宿は古くから開けた交通の要衝。平治の乱では杭瀬川を利用して源義朝は落ち延び、江戸時代には大理石細工が名産品として評判を呼びました。明治時代に入ると石灰産業の隆盛とともに杭瀬川舟運は発達しますが、鉄道網や河川改修によりその長い歴史に幕を降ろしました。

歴史ドキュメント

赤坂宿のルーツ

赤坂宿(大垣市赤坂町)は中山道六九次のうち、五七番目の宿場町です。大垣藩の城下町大垣とは独立した町を形成し、赤坂の東側を流れる旧杭瀬川を利用した舟運も盛んで、往時には上り下りする舟が数百艘も見られました。町並みの中央の四辻からは北へ谷汲街道が分

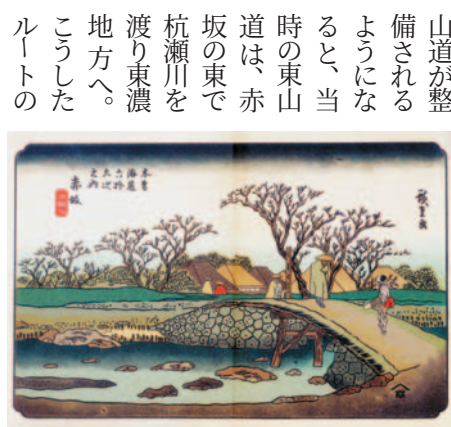


中山道から脇街道へ

岐、西国三三番霊場に至る巡礼街道でした。

赤坂宿の名前が歴史に登場するのは平安時代のこと。長元四年(一〇三二)、平忠常事件が発生。上総で乱を起こした忠常が捕らえられ、京へ連れ上る途中で病死した場所が、美濃赤坂宿であったと記している文献があります。その一方、病死した場所は美濃国野上だという説も。当時すでに赤坂宿があったかどうかは定かではありませんが、律令時代、大和朝廷の中央集権化に伴い、東海道と東

山道が整備されるようになると、当時の東山道は、赤坂の東で杭瀬川を渡り東濃地方へ。こうしたルートの



美濃赤坂宿の五七次(浮世絵)

中で、野上や赤坂が往來の拠点として成長していったようです。

平安時代、東山道の宿駅として



谷汲街道のみちしるべ

て大いに利用されていたのは赤坂に程近い青墓宿でした。この青墓で源氏と深い関わりをもっていた豪族が大炊氏でした。大炊氏は円興寺を建立するなど、青墓長者と呼ばれるほど隆盛をきわめており、大炊氏が駅長を務めていたことから青墓宿も発達したのでしょう。大炊氏は源氏の為義や義朝がここを往来することによって、彼らを自家に宿泊させただけでなく、その娘に接待をさせ妾となる者もあり、源氏とのさらに密接な関係が結ぶようになりま。平治の乱に際しては、落ち延びた源義朝と長男の義平、二男朝長、三男頼朝を助けていますが、二男の朝長は、ここで亡くなり円興寺に葬られました。この



赤坂宿から垂井宿へ

円興寺は最澄ゆかりの古刹で、現在、国の重要文化財に指定されています。

また青墓は遊女やくづがいた宿としても有名で、の中には、和歌に秀でた者もあり、当時の歌集に載るほどの歌人を輩出。都の公家たちの羨望を集めるほどでした。

東西の要衝だった株河駅

源頼朝は鎌倉幕府を開き、建久五年（一一九四）には鎌倉と京都間の交通を整備。西濃地方では墨俣・青墓が大規模な宿駅として、小熊・野上が小規模な宿駅として整備されました。次いで寛喜四年（一二三二）になると、北条義時が家臣を杭瀬川駅に遣わして食糧に窮した旅人を救済したと、吾妻鏡に記されています。この杭瀬川駅の成立時期は不明ですが、鎌倉幕府の初め頃までは公設の宿駅が青墓にあったことから、その後において杭瀬川駅に移され、青墓や野上の宿駅は廃絶していったようです。

杭瀬川は現在でも、用水路のような小さな流れですが、かつては揖斐川本流だった河川です。株瀬川・赤坂川・苦医瀬川・久瀬川とも呼ばれ、揖斐川とは別個の河川でした。鎌倉時代、濃尾平野の大河川は、墨俣川（旧木曾・長良川本流）とこの杭瀬川の二大川のみ。「新撰美濃誌」や「濃飛両国通史」に、不破の関から杭瀬川・墨俣川の地域は「東西両国の通路立分の要害軍用の固め等一の切所をなし、「東西事あらんか、そが必争のちまた」と記しているように、承久の乱などでこの両川は合戦の舞台となっていました。東西の要衝として早くから時の権力者が

着目し、東山道の要地として開けていたようです。

杭瀬川右岸の赤坂付近には、中世の東山道沿いに株河駅があったとされています。株河駅とは杭瀬川の宿のことと考えられ、「東関紀行」には仁治三年（一二四二）作者源親行が東国に旅する途中、「くみせ河」に泊まったことがみえています。しかし株河駅は鎌倉後期以降、文献にみえなくなることから、赤坂宿にとりて代わられたようです。「覽富士記」によれば、作者堯孝は永享四年（一四三二）、「くみせ川」を渡り、「夕されは霧た」とし河の名のくいせもとめて舟や繫ぐんと詠んでいます。

当時の流路は現池田町付近より南流し、若町付近から大垣市南部を経て、横曽根で揖斐川の流路に入っていたようですが、享祿三年（一五三〇）の大洪水で揖斐川本流は現河道に移り、杭瀬川の流路は現在のルートになったと考えられています。

金生山と刀鍛冶

赤坂宿のあった大垣市赤坂町は日本でも有数の石灰工業の町です。赤坂の北にそびえる金生山一帯の山麓には石灰



明星輪寺

工場が林立し、石灰生産量は全国の四分の一に達しています。金生山の名が歴史に登場す

るのは奈良時代のこと。持統天皇の命により役行者が山頂に明星輪寺を創建したと伝えられています。この山はその名が示す通り、金属が採掘されていたようで、古くから金生山の鉄を中心として製鉄が行われていたようです。というのも、金生山の中央部、更紗山には石灰石とともに良質な赤鉄鉱があるほか、刀づくりに必要な粒子の細かい粘土も豊富にありました。こうした条件から、鎌倉時代から室町時代にかけて、刀鍛冶の町として発展していきました。

大和千手院の流れを汲む赤坂千手院派と呼ばれた流派は、赤坂鍛冶の主流でした。世に名高い「関の孫六」も、実はこの赤坂に在任した刀匠ではないかといわれています。というのも、初代二代の刀には「濃州赤坂住兼元」とあり、このことから二代目までが赤坂で刀を作り、その後、彼の弟子や子孫が関へ移住したのではないかと思われます。

金生山の豊富な資源が刀鍛冶を育て、東山道や杭瀬川を利用した交通網が「孫六兼元」の名を国内に広めたのでしょう。孫六兼元が刀を作った場所は不明ですが、鍛冶屋町と呼ばれた町もあったようです。

赤坂宿の町並み

江戸時代に整備された五街道のひとつ中山道の五七番目の宿場町が赤坂宿です。美江寺宿と垂井宿の中間にあたり、北に金生山を背負い南に開けた美濃有数の宿場町でした。

宿場の中央には「お茶屋屋敷」があります。これは徳川家康が、中山道沿線に



お茶屋屋敷



姫普請



臨本陣跡

陣を務めた旧家の矢橋家に払い下げられ、ポタン園として一般に公開されています。

赤坂宿の本陣は皇女

和宮が下向に際し宿泊されましたが建物はない、本陣門が移築し残されており、本陣跡は赤坂本陣公園に。本陣跡の石柱、和宮降嫁をしのぶ碑が建っています。

赤坂宿の脇本陣は、和宮ご通行の文久元年（一八六二）に建てられたようです。この脇本陣は明治以降一部解体されて町役場となり、母屋は榎屋旅館として現在にいたっていますが、奥の上段の間を中心に昔の面影を残し、泥棒や隠密を防ぐ紙天井やうぐいすばりの廊下が特徴です。

赤坂には文久元年建築の家がまだ残っていますが、これは和宮一行の通過にあたりて宿内に見苦しい家があつては恐れ多いというので、五四軒の家を新築したものの、費用は十年債で幕府から借りたのですが、まもなく幕府が倒れたため三年ほどの返済ですんだと、宿では大喜びだったようです。これらの建物を姫普請といい、中山道の側からみると二階建てで後ろから見ると一階建てという構造。もともと一階建てだったものを急きよ二階建てにつくりかえたのでした。

赤坂宿と大理石細工

江戸末期、谷理九郎・鼎父子によって始められたのが大理石細工でした。

幼い頃痘瘡のために片目が見えなくなった鼎は父といっしょに金生山の大理石を集め、細工を始めることに。どんどん技を向上させた鼎は天保元年（一八三〇）に硯を完成。以後、大理石細工は本格的に行われるようになりました。大理石細工の多くは、かんざしや根がけ、き

ざみタバコ入れのおじめ玉や置物などでしたが、江戸への参勤交代で通る大名や武士、旅人などに喜ばれ、赤坂宿の名産品となりました。

石灰産業と杭瀬川舟運

かつて揖斐川の本流だった杭瀬川は水量も豊富で赤坂からの川舟の航行が盛んでした。平治の乱に敗れた源義朝が柴舟に乗って杭瀬川を下り、尾州内海に赴いた話は余りにも有名です。また義朝の娘夜叉姫身投げ伝説を残すのもこの川。享禄三年の大洪水以後、揖斐川は川上から押し流された砂礫などで堰き止められて、本流は現在の流路に移り、杭瀬川は揖斐川の支流となりました。

しかし水源地の池田山から出る湧水や自然の湧水により水量は依然豊富でした。江戸時代以降、赤坂河岸が設けられ、沿岸下流の三港、烏江・栗笠・船附を中継地点として伊勢湾方面に連絡し、諸藩の蔵米や材木、米、酒などを川舟で輸送。また、桑名を経て伊勢・尾張・三河へ通じる旅人の交通に利用され、白帆に風をはらんだ帆船は杭瀬川の風物詩でした。

赤坂宿は

明治以降の東海道をはじめとした交通網の発達により大きな衝撃を受け、近代産業の発達により金生山の大理



赤坂湊

石や石灰製造も活性化。明治半ばから大正初めにかけ、ては石灰産業と結びついて舟の往来が盛んになり、杭瀬川は水運に大いに利用されるようになりました。

赤坂湊が整備されたのは明治二年（一八八九）ごろ。赤坂土場（東土場）と呼ばれる繋留場は、全長七間（約一二六m）の鵜飼舟が三艘並んで横付けでき、二・三艘が入舟できる規模でした。次いで「東土場」が開設され、さらに明治二五年には少し上流の揖斐郡池田町に「市橋湊」が建設されました。

当時、これらの湊からは、鵜飼舟（平均六・七七）が石灰・石灰石のほか、材木・薪・瓦・米・炭・土灰・わら・灰・大理石などを積んで、近くは杭瀬川・揖斐川沿岸の各港、遠くは桑名・四日市・名古屋まで運び、帰りには塩や石灰、コークスなどを運んで川を上ってきました。

赤坂湊が出来た頃、赤坂の舟持ちは八〇余名に及び、

赤坂湊に出入りする舟は数百艘にのぼりました。明治三九年に設立された「金生船組」の登録数は三八六艘に達しています。実際



鵜飼舟の進水式



赤坂湊の常夜灯

には五三六艘ともいわれていました。

杭瀬川の舟運は、赤坂の石灰産業の発展に大きな役割を果たしましたが、大正八年（一九一九）の美濃赤坂線の開通によって舟運は急速に衰退、さらに昭和十三年（一九三八）、大垣市笠木町地内に杭瀬川開門が建設されたことにより舟の往来が不可能になり、杭瀬川舟運はその歴史を閉じることとなりました。



杭瀬川開門



旧杭瀬川の赤坂大橋

参考文献

- 『新装版 今昔中山道独案内』 今井金吾著 平成九年 日本交通公社
- 『岐阜県の中山道（新版）』 松尾一著 平成三年 まち出版
- 『石灰とともに二世紀』 平成五年、上田石灰製造株式会社
- 『岐阜県治水史』 昭和二八年 岐阜県
- 『赤坂町史』 昭和二八年 赤坂町役場
- 『美濃路を歩く』 大垣市史 青曇編 通史編 昭和五二年 大垣市



東西勢力対峙の

赤坂・杭瀬川

岐阜女子大学地域文化研究所長 丸山幸太郎氏

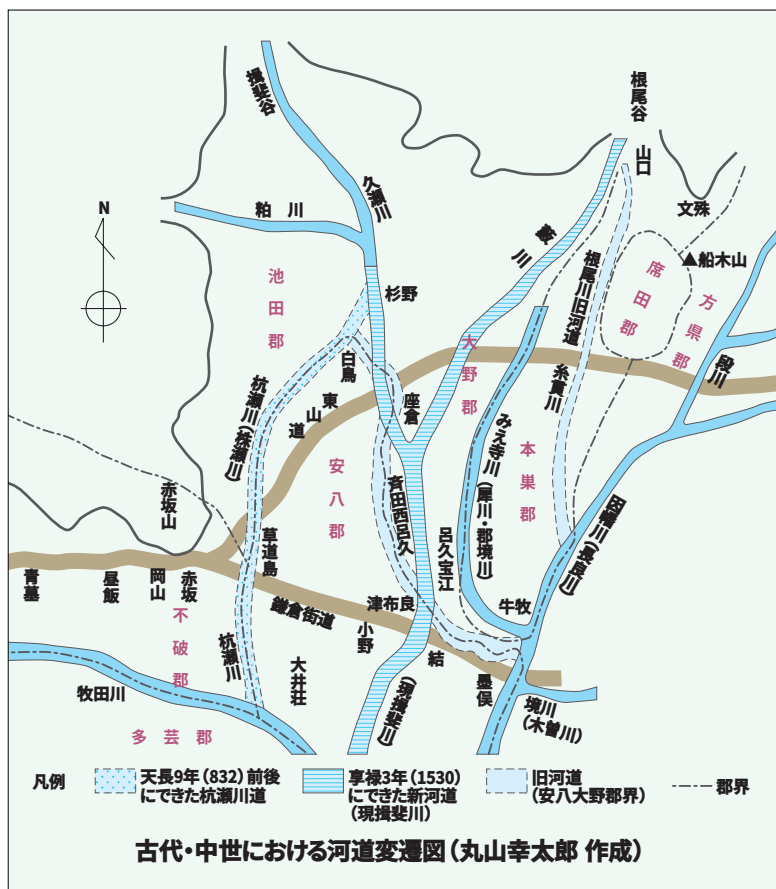


丸山幸太郎氏

昭和12年8月岐阜県恵那市に生まれる。岐阜大学史学科卒、県歴史資料館長、岐阜市明徳小学校長を経て退職。現在岐阜女子大学文学部客員教授、同地域文化研究所長。池田町在住。

主な著書：「幕藩制解体過程の農村」、「古田織部」、「日本農書全集第一期八巻」及び「同二期八巻」、「岐阜県史」、「岐阜市史」、「揖斐川町史」、「池田町史」、「南濃町史」、「平田町史」、「輪之内町史」、「恵那市史」、「宮村史」、「神岡町史」、「上矢作町史」等他、多数。

平成14年には「ぎふ観光と食文化」（岐阜県先人顕彰研究会）を発行して注目を集める。



古代・中世における河道変遷図(丸山幸太郎 作成)

軍事上の要地でもあった。

壬申の乱時は大海人皇子の軍兵・兵器の調達拠点となり、源平の抗争・合戦時代には両勢力拮抗の地あるいは流転の地となり、関ヶ原合戦時には東軍の家康本営が築かれ、西軍（石田三成方）が籠もる大垣城と対峙した。

一、壬申の乱と赤坂周辺

天智一〇年（六七二）一二月三日、天智天皇が没すると、吉野に出家隠棲していた大海人皇子の身辺には、天智の子大友皇子を擁立する大津宮の大豪族など近江朝勢力によって攻撃の手が次々打たれ、危険が迫っていた。翌六七二年六月二二日、大海人皇子は、このまま坐死するより、挙兵して反乱することを決意し、身辺に仕える美濃出身の舎人村国男依・和珥部臣君手・身毛君広の三人を、自分の領地である美濃杭瀬川流域の安八磨郡湯沐邑へ派遣し、軍兵・兵器を準備させた。

この大海人皇子（後の天武天皇）の私領地としての湯沐邑は、旧安八郡全域と

見られている。旧安八郡域とは、現在の

大垣市を中心に北は揖斐郡から南は海津郡平田町に及ぶ揖斐川流域諸市町村域である。近年発見された名古屋博物館所蔵の「倭名類聚鈔」写本に「美濃十八郡、承和四年安八郡より池田郡を割く」という記載があることから、承和四年（八三七）杭瀬川以西は池田郡として分立したのである。この池田郡の分立は天長九年（八三二）前後に杭瀬川大洪水の発生と荒廃・再開発があったことによる、と見られる。

壬申の乱時の湯沐邑は、のちの池田郡を分立する以前の赤坂金生山及び池田山の東麓から杭瀬川にかけて広がる豊かな水田地帯であった。当時の杭瀬川は、大野郡と安八郡の郡境を南流し、墨俣の北へと東流して因幡川（長良川）と合流していた、と見られ、池田町あたりでは、揖斐川の現流とはほぼ同じところを南流していたようである。

この湯沐邑の令（管理者）は、多臣品治で大海人皇子の腹心の官人として、その経済的・軍事的基盤の湯沐邑を統治し

赤坂は、古代は東山道、中世は鎌倉街道、近世は中山道と、日本の東西幹線街道に面してきた。また、背後には、赤鉄鉱

石を産し街道を見下ろすに兵に濃尾平野を一望できる金生山を控え、東には自然の要害杭瀬川（のち揖斐川）が南流、

ていた。壬申の乱時には、村国男依ら三名の舎人と共に、徴兵と兵器調達を推進した。壬申の乱後は、天武一三年(七八四)十一月紀で朝臣姓を与えられ、貴族官人の地位にのぼっている。ちなみに、「古事記」の選者として知られる大朝臣安麻呂は、その子とする伝えがある。

湯沐邑付近が、武器の生産・調達地として全国でも屈指の地であった、という論は既に、八賀晋氏の「不破道を塞ぐ考」『論苑考古学』一九九三所収がある。金生山には良質の赤鉄鉱の鉱脈があり、第二酸化鉄(Fe_2O_3)としては九二パーセントに達する高品位で、戦時中は日本軍が採掘し、戦後昭和二五年まで産出。北九州八幡製鉄所へ送られていた。古代においては、美濃国国府(垂井町)発掘調査中、安立寺西側で鍛冶工房跡が発見され、金生山の赤鉄鉱利用とみなされている。『関鍛冶刀祖調査報告』(平成六年)によれば、関市塚原古墳群(後期古墳)出土の刀子を分析した結果、金生山産出赤鉄鉱の精錬鋼であることが判明した。当時、含有率二〇〜四〇パーセントの砂鉄が製鉄の主原料であったので、金生山の赤鉄鉱産地をいち早く掌握した大海人皇子は、軍事的に優位に立つことができた、ともいわれている。

挙兵軍の動員を命じて美濃へ村国男依ら三名の舎人を急派させた二日後の六月二十四日、大海人皇子は正室鸕野皇女(のちの持統天皇)らをつれ、吉野を出発。大和の菟田を経て伊賀名張から鈴鹿峠を越えて伊勢へ入り、二六日の午前、伊勢朝朝郡家に及ぼうとしたとき、美濃国において動員が成功し、不破道が



弘文天皇壬申難旧跡・関ヶ原合戦岡山本陣跡
家康が関ヶ原合戦時、壬申の乱の勝利者大海人皇子の遺跡をたどったことに対し、明治維新で王政復古となり、大友皇子の歴史的復権がなされ、家康戦勝記念地に大友皇子即ち弘文天皇の記念碑が建てられた。

確保できたという、村国男依からの報告に接し、皇子一行は朗報に沸いた。このとき、高市皇子を美濃国不破郡に遣わし、現地での軍事を監督せしめた。二七日には、大海人皇子は、桑名郡から美濃不破郡へ進み、赤坂より西方の野上関ヶ原(野上)に本営をおき、呼び掛けに応じた諸国の軍隊や、進んで参軍した地方豪族の部隊を編成して、関ヶ原の地での対戦の勝利を手はじめに、七月に入ると近江へ攻め入った。同月二二日には、瀬田橋の決戦で敗走した大友皇子(諡名弘文天皇)は、翌二三日自殺し、天下分け目の大戦は、大海人皇子軍の勝利をもって終わった。

赤坂はこの大戦で、大海人皇子挙兵軍の主力となった美濃国を始めとする東国軍の集結場となり、その兵器を調達して、勝利に導いた地となった。

二、源平の合戦と赤坂

藤原氏を中心とする貴族政権支配の

平安時代は、九世紀から一〇世紀にかけては、比較的平穏な時代であった。平安中期の長保年間(九九九〜一〇〇四)、歌人赤染衛門は、夫尾張守大江匡衡の任地尾張を訪ねる途中、株瀬川(杭瀬川)岸(赤坂)に宿泊し、杭瀬川で展開される夜鶴飼を観て、和歌を詠んだ。
ゆうやみの鶴舟にともすかり火を
水なる月の影かとぞ見る

『赤染衛門集』

このとき、杭瀬川は、天長九年(八三二)前後の杭瀬川大洪水による河道変化で、杉野・白鳥辺から南南西へ本流が流れ、赤坂のすぐ東を南流していた。

平安後末期となると、武家勢力が台頭し、武家の頭領の平家・源氏の二大勢力が拮抗し、不穏な情勢となった。平治元年(一一五九)二月四日、熊野詣でに出発した平清盛の留守をねらって、源義朝は、五〇騎を率い、院の御所を襲い、後白川上皇・二条天皇を幽閉した。しかし、このことを予知した清盛は大軍をもって義朝軍を敗り、二条天皇を八波羅に迎えた。敗走した義朝は、美濃源氏の青墓の大炊長者(兼遠か)を頼り、一先ず息をついたが、傷の深い次男朝長(ともなが)を手にかき刺殺して葬った。二月二十八日、平氏や土民の押し寄せるのを避けようと

出立しようとしたが間に会わず、追手軍と奮戦した。しかし衆寡敵せず、味方の大半を失い、赤坂の地に退いた義朝は、主従わずか三、四人となり、舟で杭瀬川を下った。その後、義朝は、乳母ゆかりの長田忠致を頼ろうと知多半島の野間に向かったのであるが、そこで討たれてしまった。

この平治の乱から三〇年は、平家の天下となり源氏王国であった美濃は、臥薪嘗胆を余儀なくされる。治承四年(一一八〇)伊豆において、源頼朝が挙兵をすると、東国の源氏諸勢力は行動を開始した。翌治承五年(養和元年)源十郎行家と義円の軍勢は、頼朝追討の平家の大軍(頭中将重衡・権亮少将維盛以下七〇〇〇人)を、墨俣川で迎え討とうとした。このとき、平家の追討軍は、赤坂から杭瀬川そして墨俣右岸に配陣された。

この墨俣川の戦いは、行家・義円の先陣争いで、行家側の全面敗北となるが、尾張矢作川で行家の謀略によって、平家は大敗走し、大将の重衡らは、京都に帰り、やがて、東国の源氏勢力に追われて、西国へ引きさがり、平家滅亡を結果するに至る。

赤坂・杭瀬川はこのように、源平両勢力拮抗・流転の舞台となり、悲哀に満ちた様々の人間ドラマが展開された。

三、関ヶ原合戦と赤坂・杭瀬川

慶長三年(一五九八)八月、豊臣秀吉が没すると、徳川家康は、その後の政権の主導権掌握を策謀し、同五年七月一七日、石田三成を首謀者とする家康討伐の挙兵の動きを表面化させた。すなわち、関ヶ原合戦の火蓋はきかれたのである。八月二日には、三成は軍勢を率いて大垣城に入った。これに対し東軍は、同月二〇日、福島正則の居城清洲で諸將會議を行い、翌二一日木曾川を渡河し、美濃に攻め入り、翌二二日には、織田秀信たちが迎撃する岐阜城を攻めた。この日、杉浦氏の竹鼻城を落とした黒田・藤

BOOK紹介



『定本 長良川 母なる川—その悠久の歴史と文化』

郷土出版社刊
編集委員代表 丸山幸太郎

本書は、源流から河口まで、長良川とその主な支流（吉田川・板取川・武儀川など）にまつわる民俗・歴史・文化・自然・地形・産業・暮らし等を多角的に紹介する、初めての本格的な「定本」です。また、最新・未発表の興味深いトピックスも収録。川が育んだ独特の文化や習慣、川から生まれた伝説なども満載しています。写真や図版、グラフなどを多用しています。年配の方々までみんなで楽しめる構成となっています。



『ぎふ観光と食文化』

岐阜県先人顕彰研究会刊
著書 丸山幸太郎

歴史学者である丸山幸太郎氏が、平成九年より四〇数回にわたり岐阜県警察本部月刊誌「華陽」に連載した「岐阜の食文化をたずねて」をまとめた一冊。人間にちてなくてはならない食を地域性や文化及び歴史的な観点から紹介しています。食事のスタイルが欧米化し多様化した昨今、「伝統食とは郷土食とは何か」をシリーズのテーマに、岐阜県全域の食文化を網羅、名物料理や特産品づくりに関わる人々の姿も温かく描き出しています。

堂・田中隊らは翌三日には、西軍が迎撃するのを打ち破りながら、長良川・

隊が将といたたく家康の本営築造の適地として予定されていたのであろう。以



関ヶ原合戦御陣場図(部分)岐阜県歴史資料館蔵

揖斐川・杭瀬川を渡河し、赤坂の岡山に着陣した。

福島・池田隊などは、二

三日、岐阜城を陥落させて、二四日赤坂の岡山に着

いた。岡山は西軍の首謀

者三成のいる大垣城を見

下ろす位置にあり、東に

杭瀬川があり、東軍の諸

後、九月一四日、家康本隊が、岡山に着陣するまで、大垣城及び周辺の西軍と赤坂岡山及び周辺の東軍との間で、対峙はしているが、戦いらしい戦いはしていない。おそらく、両軍とも、決戦に備えて、味方の諸隊の着陣を待っていた、ということであらう。

九月一四日朝、岐阜を出た家康が正午、岡山本営に入ったところ、西軍は失いかけた士気を高めるために、島左近に五〇騎の兵を預けて、家康本営前奇襲をかけ、放火をして東軍を挑発した。東軍の中村一栄・有馬豊氏の両隊はその挑発にのって、逃げる西軍の後を追撃し、杭瀬川を越えた。それらが伏兵の宇喜多秀家の鉄砲隊から一斉射撃を受け、多数の戦死者を出した。これは、杭瀬川の戦いと云われ、関ヶ原合戦を通して数少ない西軍の勝ち戦となった。

この夜、大垣城の西軍本隊は、南宮山

の南を回って、関ヶ原に布陣し、翌一五日の決戦で激しく戦ったが、味方の小早川秀家らに叛かれ、大敗した。

この関ヶ原合戦時の布陣図が、現在いくつか見ることができるが、その図中の赤坂の町の北部に「赤坂町人小屋」と記入された長方形の竹矢来囲いが描かれている。これは、東軍の勢力下にあった赤坂町の町民の要望で合戦に関係のない町民の避難区域が設定されたことを物語り、町民の要請を受け入れて、一般庶民を戦争に巻き込まないとする合戦への武家に姿勢をうかがうものとして注目したい。

『岐阜県史通史編古代』

岐阜県 一九七一年

・八賀晋「不破の道を塞ぐ考」

『論苑—考古学』所収 一九九三年

・関刀祖調査報告

関市刀祖調査会、一九九四年

民話の小箱

鎮守さまの竹やぶと清水

海津郡海津町

揖斐川沿いに広がる梶屋という集落には、八幡神社という鎮守さまがあります。この鎮守さまはもと南濃町の庭田村に祀られていましたが、洪水で本殿が流され、福江村に移されました。ところがまた流されて宮地に、ここでも洪水がおき、梶屋に流れ着きました。

梶屋八幡神社には、不思議なことがふたつあります。ひとつは、一年中たけのこが生える杜叢です。一株が周囲一メートルほどにもなるこの竹は、節と節との間が長く、黒い光を放つことな寒竹です。神社が流れ着いたところには必ず自生し、宮地へも梶屋に移つてからも、自然に生え始めたそうです。この竹は、宮地と梶屋の戸数が増えるとその株数を増やし、戸数が減ると株数を減らす不思議な竹です。

鎮守さまの境内にはもうひとつ、ずっと昔から水が枯れたことのない清水があります。この神社のもとになっている京都の石清水八幡宮にも、同じようにこんこんと湧く清水があります。美しい清水は万病にきくといわれ、毎月一日と一五日には、地元をはじめ、

遠く名古屋からもたくさんの方がお参りします。お盆と祭りの夜には、さまざまな絵がかかれた大提灯が、煌々と境内を照らします。

本殿と拝殿は昭和五五年に建て直されました。

不思議な寒竹は昭和五七年に海津町の天然記念物に、その翌年には、岐阜県の特別記念物に指定されました。



木曽川文庫利用案内

編集後記

今号から、文字を一回り大きくするとともに、ページ数を増やして内容のさらなる充実をはかりました。

弊紙では、読者のみなさんの声で構成するコーナーを企画しています。身近でおこった出来事、地域の情報などをお知らせ下さい。

今号の編集にあたって、岐阜県海津郡海津町の皆様、及び丸山幸太郎氏にご協力いただきありがとうございました。お礼申し上げます。

次回は、愛知県尾西市を特集します。ご期待ください。

宛先 「KISSO」編集 FAX(0567)24-5166

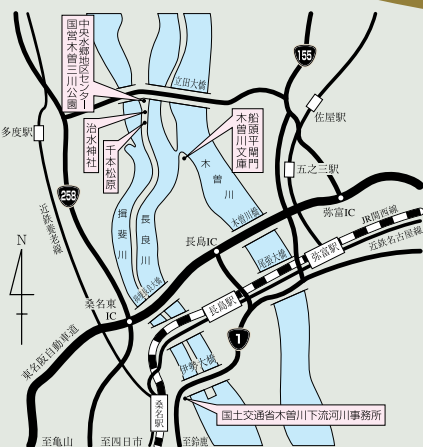
木曽川文庫ホームページ
<http://www.kisogawa-bunko.cbr.mlit.go.jp>

《開館時間》午前9時～午後4時30分
《休館日》毎週月曜日・祝祭日・年末年始
《入館料》無料
《交通機関》国道1号線尾張大橋から車で約10分
名神羽島I.Cから車で約30分
東名阪長島I.Cから車で約10分

《お問い合わせ》
船頭平閘門管理所・
木曽川文庫
〒496-0947 愛知県
海部郡立田村福原
TEL(0567)24-6233



●表紙写真●上左：治水神社の例祭 上右：軒下の上げ舟 上右下：高須輪中排水機場 下：長良川と千本松原



『KISSO』Vol.47 平成15年7月発行

発行：国土交通省中部地方整備局木曽川下流河川事務所 〒511-0002三重県桑名市大字福島 TEL (0594) 24-5715

木曽川下流河川事務所ホームページ URL <http://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu>

制作：財団法人河川環境管理財団 〒450-0002愛知県名古屋市中村区名駅四丁目3番10号（東海ビル） TEL (052) 565-1976